『表現学』第七号　令和三（二〇二一）年二月五日　抜刷
大正大学表現学部表現文化学科

『トニー滝谷』の本文改訂（八）

―ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写（3）―

森　晴彦

『トニー滝谷』の本文改訂（八）

―ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写（3）―

森　晴彦

本稿では、ショート・ヴァージョンと、ロング・ヴァージョンｃ-１（『全作品⑧』）、ロング・ヴァージョンｃ-２・３（単行本・文庫本『レキシントンの幽霊』）の本文批評を比較し、登場する女性に関する描写について増補訂や削除を中心とした本文異同を指摘・考察し、創作過程論上、特記せねばならないことなどを指摘していこうとするものである。

本文への記号は、概ね以下の方針で付している。

（b-１・２）ショート・ヴァージョンにあるもロング・ヴァージョンｃ-１（『全作品⑧』）で削除された箇所を□で囲み示した。両ヴァージョン間で異同がある箇所には傍線を付した。

『全作品⑧』（ｃ-１）にあるが『レキシントンの幽霊』単行本（ｃ-２）文庫本（ｃ-３）で削除された箇所は□で囲んだ。ヴァージョン間で異同がある箇所や改訂、単行本・文庫本で新たに挿入された文言に二重傍線を付した。

アシスタント応募女性の改訂

トニー滝谷の妻が遺した服を着せて働かせるアシスタントの女性を募集する。その女性の描かれ方についての異同をここでは見ていきたい。

（b-１・２）ショート・ヴァージョン

□妻の葬儀が終わった十日後に、トニー滝谷は新聞にアシスタントの女性を募集する求人広告を出した。サイズ７、身長１６１センチ前後、靴のサイズ２２の女性を求む、高給優遇。彼の提示した給与は破格と言ってもいいものだったので、全部で十三人の女性が南青山にある彼の仕事場兼事務所に面接を受けにやってきた。その

はじめに

村上春樹『トニー滝谷』の本文異同についての考察を続け[1]、前稿では、ショート・ヴァージョン（「文藝春秋」ｂ-１、『文藝春秋短篇小説館』ｂ-２）と、ロング・ヴァージョンｃ-１『村上春樹全作品1979～1989⑧』（平三、講談社。以下『全作品⑧』と略称）、そこから五二箇所七九個の削除改訂を施すロング・ヴァージョンｃ-２・３（単行本『レキシントンの幽霊』平成八年、文庫本『レキシントンの幽霊』平成一一年）における結婚後の妻の描写の改訂について考察したが、本稿では、アシスタント応募女性について些かの指摘しておこうとするものである。

旧稿でも示したが、本稿でも『トニー滝谷』の本文の分類について以下に簡便に示しておく。

（a）ロング・ヴァージョン

・未発表

（b）ショート・ヴァージョン

・「文藝春秋」六八巻七号、平成二年六月（ｂ-１）

・『文藝春秋短篇小説館』平成三年九月（ｂ-２）

（c）ロング・ヴァージョン

・『村上春樹全作品1979～1989⑧』平成三年七月（ｃ-１）

・単行本『レキシントンの幽霊』平成八年一一月（ｃ-２）

・文庫本『レキシントンの幽霊』平成一一年一〇月（ｃ-３）

内の五人まではあきらかにサイズを偽っていた。残りの八人のうちから、彼はもっとも妻の体型に近い女性を選んだ。これといって特徴のない顔をした二十代半ばの女だった。彼女は飾り気のない白いブラウスを着て、ブルーのタイト・スカートを履いていた。

（c-1・2）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（単行本）

葬儀の十日後に、トニー滝谷は新聞にアシスタントの女性を募集する求人広告を出した。サイズ7、身長161センチ前後、靴のサイズ22の女性を求む、高給優遇。彼の提示した給与は破格と言ってもいいものだったので、全部で十三人の女性が南青山にある彼の仕事場兼事務所に面接を受けにやってきた。その内の五人まではあきらかにサイズを偽っていた。残りの八人のうちから、彼はもっとも妻の体型に近い女性を選んだ。これといって特徴のない顔をした二十代半ばの女だった。彼女は飾り気のない白いブラウスを着て、ブルーのタイト・スカートをはいていた。服も靴も清潔ではあったが、よく見るといささかくたびれていた。

（c-3）ロング・ヴァージョン（文庫本）

葬儀の十日後に、トニー滝谷は新聞にアシスタントの女性を募集する求人広告を出した。サイズ7、身長161センチ前後、靴のサイズ22の女性を求む、高給優遇。

次も含め、説明的な補足がなされる箇所でもある。特に応募女性の生活状態を詳述し、持ち物等の品質が妻の服と格差があることを定位しようするための増補がなされている。ロング・ヴァージョンで追加される「服も靴も清潔ではあったが、よく見るといささかくたびれていた」は、ショート・ヴァージョンのようになくても通るところである。あえて普及品を使い込んでいる様を増補している。

ロング・ヴァージョン（c-3）『レキシントンの幽霊』文庫本）では靴のサイズの「22」が「22」となっている。b-1（文藝春秋）、b-2（同短篇館）、c-1（全作品⑧）、c-2（レキシントンの幽霊単行本）と「22」で来たものが、ここで直されている。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

トニー滝谷は女に言った。仕事自体は簡単なものだ。毎日九時から五時まで事務所に来て、電話の応対をして、原稿を届けたり資料を受け取ったり、コピーを取ったりしてもらうだけだ。ただしひとつ条件がある。実は私は妻を亡くしたばかりで、妻の服が家に非常に沢山残っている。それをここで働くあいだ制服のかわりにあなたに着てほしい。だから服のサイズと靴のサイズと身長を採用の条件につけたのだ。これはおそらく奇妙な話に聞こえるとは思う。それはよくわかっている。でも自分には何の他意もない。ただ妻がいなくなったという事実に慣れるのに時間がかかるだけなのだ。私はまわりの空気の圧力のようなものを少しずつ調整していかなくてはならないのだ。そういう期間が自分には必要なのだ。そのあいだあなたに妻の服を着て近くにいてほしい。そうすれば自分にも妻が死んでいなくなったということが理解できるようになるはずだから。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（単行本・文庫本）

トニー滝谷はその女に言った。仕事自体は何も難しいことはない。毎日九時から五時まで事務所に来て、電話の番をして、私のかわりに原稿を届けたり資料を受け取ったり、コピーを取ったりしてもらうだけだ。ただしひとつだけ条件がある。実は私は妻を亡くしたばかりで、妻の服が家に非常に沢山残っている。そのほとんどは新品があるいは新品同様である。それをここで働くあいだ制服のかわりにあなたに着てほしい。だから服のサイズと靴のサイズと身長を採用の条件につけたのだ。これはおそらく奇妙な話に聞こえると思う。あなたはこれはちょっと胡散臭い話だと思うに違いない。それは自分にもよくわかっている。でも自分には何の他意もない。ただ妻がいなくなってしまったという事実に慣れるのに時間がかかるだけなのだ。つまり私はまわりの空気の圧力のようなものを少しずつ調整していかなくてはならないのだ。そういう期間が自分には必要なのだ。そのあいだあなたに妻の服を着て近くにいてほしい。そうすれば、自分にも妻が死んでいなくなったということが実感としてつかめるはずだから。

ここはショート・ヴァージョンの「（仕事は）簡単なものだ」＋「電話の応対」を、ロング・ヴァージョンでは「何も難しいことはない」＋「電話の番」と簡単なものにしたと考えられる。原稿届やコピーはそのままである。

トニー滝谷の仕事内容が突飛なものであることに疑いをもつであろうことを先回りしてロング・ヴァージョンでは胡散臭い話云々に見えるであろうことを示し、自覚もしているが、それもこれも妻の死を受け入れるために必要な調整であることを強めて

いる。妻の死を、ショート・ヴァージョンでは「理解できるようになるはずだから」だったが、ロング・ヴァージョンでは「実感としてつかめるはずだから」に改訂している。トニー滝谷としては「理解できる（つまり現在は理解していない）」の方が適切とは思うが、そこは妻の死を目の前で実際に体験しているわけだから「実感としてつかめる（理解はしているが今は実感としてつかめていない）」の方が無理はない。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

女はしばらくそれについて考えた。たしかに奇妙な話だった。正直なところ、彼女にはトニー滝谷の話の筋道がよく理解できなかった。普通だったら何か裏があると考えるべきところだろう。でもこの人は悪い人ではなさそうだ、と彼女は思った。それに何といっても彼女は働かなくてはならなかった。何ヵ月もずっと仕事を探しつづけていたのだ。来月には失業保険も切れる。これだけの給料を出してくれる職場はまずないだろう。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（単行本・文庫本）

女は唇を噛みながらその奇妙な条件について素早く頭をはたらかせた。それはたしかに変な話だった。正直なところ、彼女にはトニー滝谷の言っている話の筋がよく呑み込めなかった。奥さんが最近死んだということはわかった。彼女が沢山の服をあとに残していったこともわかった。しかしどうして自分が彼の前でその服を着て仕事をしなくてはならないのか、彼女にはもうひとつ理解できなかった。普通だったら何か裏があると考えるべきところだろう。でもこの人はそれほど悪い人ではなさそうだ、と彼女は思った。それは相手の話しぶりを聞いていればわかる。奥さんをなくしたことでちょっとどこかがおかしくなっているのかもしれないが、そのことで誰かに害を及ぼすようなタイプには見えない。それに何といっても彼女は働かなくてはならなかった。この何ヵ月かずっと仕事を探しつづけていたのだ。来月には失業保険も切れる。そうなるとアパートの家賃を払うのもむずかしくなる。これだけ良い給料を出してくれる職場はおそらくこの先もう二度と見つからないだろう。

基本的に増補による補遺をしている箇所である。ショート・ヴァージョンの「話の筋密がよく理解できなかった」を「話の筋がよく呑み込めなかった」に改訂した上で、奥さんの死と残された沢山の服、しかしなぜ彼女がその服を着て仕事をするのかわからない、彼女側の疑問が前面に出て来る補遺となっている。ロング・ヴァージョンの方がこの彼女の疑問が挿入されることで「ショート・ヴァージョンの「奇妙な話」を改訂し、ロング・ヴァージョンで改訂した「奇妙な条件」の内容が明確となり、かつなぜ彼女の服を着てトニー滝谷の前で仕事をするのか、という根本的な問題を問う形になっている。

ただ、胡散臭い話であっても、彼女の方は断れない状況であることを補足しているのがロング・ヴァージョンの描写である。失業保険が切れたらアパートの家賃も払えなくなるし、ショート・ヴァージョン「これだけの給料」をよりに説明した「これだけ良い給料」を出してくれる職場は「二度と見つからない」（ロング・ヴァージョン）と増補することで、彼女がかなりの高い確率で引き受けざるをえない状況を補強している。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

わかりました、と彼女は言った。たぶんおっしゃるとおりにできると思います。でもその前に一応お洋服を見せていただけますでしょうか、本当にサイズが合うかどうかもわかりませんし。もちろん、とトニー滝谷は言った。そして女を自分の家に連れていって、部屋いっぱいの洋服を見せた。デパートを別にすれば、そんなに多くの服がひとつの場所に集まっているのを女はそれまで見たことがなかった。そしてそのどれもが見るからに金のかかった上等なものだった。趣味も申し分なかった。それはひどく眩しい眺めだった。彼女はうまく息ができなかった。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（単行本・文庫本）

わかりました、と彼女は言った。私には細かい事情まではわかりかねますが、たぶんおっしゃるとおりにできると思います。でもその前に一応そのお洋服を見せていただくことはできますでしょうか、本当にサイズが合うかどうか試してみた方がいいと思うのですが。もちろん、とトニー滝谷は言った。そして女を自分の家に連れていって、部屋いっぱいの洋服を見せた。デパートを別にすれば、そんなに多くの服がひとつの場所に集まっているのを女はそれまで見たことがなかった。そしてそのどれもが見るからに金のかかった上等なものだった。趣味も申し分なかった。それはひどく眩しい眺めだった。彼女はうまく息ができなかった。意味もなく胸が

どきどきした。それはどこか性的な高揚感に似ているように彼女には思えた。

増補のされ方を見ても判るように、ロング・ヴァージョンは単純にショート・ヴァージョンを補強する形で増補されている。胸の高鳴りは「性的な高揚感に似」たものとして補足している。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

泣かないわけにはいかなかったのだ。涙はあとからあとから流れ出てきた。彼女はそれを押しとどめることができなかった。トニー滝谷がやってきて、どうして泣いているのかと彼女に尋ねた。わかりません、でもあまりにも服が綺麗だからだと思います。こんなに沢山のきれいな服を見たことがなかったんで、それでたぶん訳がわからなくなっちゃったんです、と彼女は言った。そして涙を拭いた。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（単行本・文庫本）

泣かないわけにはいかなかったのだ。涙はあとからあとから出てきた。彼女はそれを押しとどめることができなかった。彼女は死んだ女の残した服を身にまとったまま、声を殺してじっとむせび泣いていた。しばらくあとでトニー滝谷が様子を見にやってきて、どうして泣いているのかと彼女に尋ねた。わかりません、と彼女は首を振って答えた。これまでこんなに沢山の綺麗な服を見たことがないので、それでたぶん混乱しちゃったんです、すみません、と女は言った。そして涙をハンカチで拭いた。

遺された綺麗な服を見て、出る涙を止められず、訳がわからなくなって、と回答する場面である。ここもロング・ヴァージョンがショート・ヴァージョンを補強する形で増補されているところで、「と彼女は言った」という長い文を一度「と彼女は首を振って答えた」と回答し、理由を続ける形に二分している。ショート・ヴァージョンの「綺麗だからだと思います。こんなに沢山のきれいな服を」は使い分けを漢字に統一してもいるし、囲み部分自体カットされている。涙を拭くハンカチなども含め、ロング・ヴァージョンの表現の方が整理されたものとなっている。「服が綺麗だからだと思います」→「沢山のきれいな服を見たことがなくて」→「訳が分からなくなっちゃったんです」のショート・ヴァージョンの流れは、「沢山の綺麗な服を見たことがないので」→「混乱しちゃったんです」にシンプルに整理されている。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

明日から仕事をしてもらう、とトニー滝谷は事務的な声で言った。とりあえず一週間ぶんの服と靴をこの中から選んで持って帰りなさい。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（単行本・文庫本）

よかったら明日から事務所に来てもらいたいのだが、とトニー滝谷は事務的な声で言った。とりあえず一週間ぶんの服と靴をこの中から選んで持って帰りなさい。

ショート・ヴァージョンでは断定的で威圧感がある言い方だが、ロング・ヴァージョンでは、問いかける形になっている。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

女が帰ったあとで、トニー滝谷は衣装室に入ってドアを閉め、妻の残していった服をしばらく眺めていた。どうしてあの女が服を見て泣いたのか、彼にはよく理解できなかった。その服は、彼には妻が残していった影のように見えた。そこにはサイズ7の彼女の影が折り重なるように何列にも並んで、ハンガーから下がっていた。それは人間の存在が内包していた無限の（少なくとも理論的には無限の）可能性の中から、サンプルとしていくつかを集めてぶらさげたもののように見えた。

それらの影は、かつては妻に付着し、妻とともに動いていた影であった。しかし今、彼の眼前にあるものは、生命の根を断ち切られて刻一刻とひからびていく滅びた影の群れに過ぎなかった。彼はそんなものを見ているうちにだんだん息ぐるしくなってきた。それはもう彼にとっては何の意味も持たないただの遺物だった。彼は自分がそんな服を激しく憎んでいることに気づいた。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（単行本・文庫本）

女が帰ったあとで、トニー滝谷は妻の衣装室に入ってドアを閉め、妻の残していった服をしばらくぼんやりと眺めていた。どうしてあの女が服を見て泣いたのか、彼にはよく理解できなかった。その服は彼には妻が残していった影のように見えた。サイズ7の彼女の影が折り重なるように何列にも並んで、ハンガーから下がっていた。それは人間の存在が内包していた無限の（少なくとも理論的には無限の）可能性のサンプルを幾つか集めてぶらさげたもののように見えた。

それらの影は、かつては妻の体に付着し、温かな息吹を与えられ、妻とともに動いていた影であった。しかし今彼の眼前にあるものは、生命の根を失って一刻一刻とひからびていくみすぼらしい影の群れに過ぎなかった。それは何の意味も持たないただの古ぼけた服だった。彼はそれを見ているうちにだんだん息苦しくなってきた。様々な色がまるで花粉のように宙に舞い、彼の目や耳や鼻腔に飛び込んできた。貪欲なフリルやボタンやエポレットや飾りポケットやレースやベルトが部屋の空気を奇妙に希薄なものにしていた。たっぷりと用意された防虫剤の匂いが、無数の微小な羽虫のように無音の音を立てていた。彼は自分が今ではそんな服を憎んでいることにふと気づいた。

彼は壁にもたれ、腕を組んで目を閉じた。孤独が生暖かい闇の汁のようにふたたび彼を浸した。これはもうみんな終わってしまったことなのだ、と彼は思った。もう何をしたところで、全ては終わってしまったのだ。

ショート・ヴァージョンの「生命の根を断ち切られて刻一刻とひからびていく」と根から分断された独立したモノとしての服と、ロング・ヴァージョンは「生命の根を失って一刻一刻とひからびていく」と本体を失った属性としての服が書き分けられていて、意味はだいたい同じでも印象が「刻一刻」が時とともにしだいに的な中、「一刻一刻」は過ぎる時間に力点を置いたかのような表現に変えている（一刻を一五分とする別解もあるが無粋なことは置いておいておこう）。

亡妻の遺した服群は、ショート・ヴァージョンは「滅びた影の群れ」で「見ているうちにだんだん息ぐるしくなってき」て、「何の意味も持たないただの遺物だった」という表現なのだが、ロング・ヴァージョンでは「みすぼらしい影の群れ」という価値判断を含んだ表現に改訂し、「何の意味も持たないただの古ぼけた服だった」と定位し、「見ているうちにだんだん息苦しくなってきた」の順番を移動し、みすぼらしい古ぼけた服の描写を増補し、「〈今では〉そんな服を憎んでいることに〈ふと〉気づく」という流れをつけ、「全ては終わってしまったのだ」を導き出す流れとしている。これがないと、応募してきた女性に断る行為に至る経緯が弱いだけに、それらのプロセスに必然性を強化するための増補改訂と考えられる。この増補で、応募女性の仕事の必要性は消失することになる。ただ、古びた服の追加描写はやや過度なきらいはないことはないが。

「彼は壁にもたれ……」以降はロング・ヴァージョンの増補なのだが、ショート・ヴァージョンだと、服への憎しみが、服を着て事務所に存在するアルバイトを女性に依頼することを断る、に連動することになるが、ロング・ヴァージョンのこの増補があることで、応募女性に妻の服を着せたところで何の意味もないことをトニー滝谷が悟るわけで、応募女性を断ることにスムーズに連結する。それだけにこの挿入文は大事である。

もちろんショート・ヴァージョンの妻が遺した「服」が「影」で、その「滅びた影の群れ」がもう「何の意味も持たないただの遺物だった」の方が詩的であり、ロング・ヴァージョンの「みすぼらしい影の群れに過ぎなかった」は結果的に妻の影を貶めすぎているし価値判断が強すぎるきらいはあるのでショート・ヴァージョンの方がよい気もするが、そんな妻の体に付着していた影である「服」を激しく憎んでいることに気づくことで服を着せる行為が無価値であることに気づき応募女性を断る過程は、ロング・ヴァージョンの描写を方がきわめて自然な流れにはなる。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

彼はすぐ女の家に電話をかけて、申し訳ないがこの仕事の話は忘れてほしいと言った。悪いとは思う、でも仕事はもうなくなったのだ。よくわかりませんが、いったいどういうことなんでしょう、と女はあっけにとられて言った。彼女はちょうど今家に帰ってきたばかりだったのだ。悪いけれど気が変わったのだ、と彼は言った。あなたが持って帰った靴と洋服は全部あなたにあげる、スーツケースもあげる、何も返さなくていい、だからこのことは忘れてほしい、この話は誰にも話さないでほしい、とトニー滝谷は言った。女はよく訳がわからなかったけれど、相手の声はとってもきっぱりしていたので、それ以上押し問答をしても無駄だろうと思った。わかりましたと言って彼女は電話を切った。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（単行本・文庫本）

彼は女の家に電話をかけて、この仕事の話は忘れてほしいと言った。申し訳ないが仕事はもうなくなったのだと彼は言った。いったいどうしてですか、と女はびっくりして尋ねた。悪いけれど事情が変わったのだ、と彼は言った。あなたが持って帰った靴と洋服は全部あなたにさしあげる、スーツケースもあげる、だからこのことは忘れてほしい、この話は誰にも話さないでほしい、とトニー滝谷は言った。女

は何がなんだかよくわけがわからなかったけれど、話しているうちにそれ以上押し問答をするのも面倒になってきた。わかりましたと言って彼女は電話を切った。

彼女側に関する、電話の台詞「よくわかりませんが」や「彼女はちょうど今家に帰ってきたばかりだったのだ」や「相手の声（トニー滝谷）はとってもきっぱりしていたので」など彼女側や彼女の立場からの描写はカットされている。「相手の声はとってもきっぱりしていたので、それ以上押し問答をしても無駄だろうと思った」も女側の見解・判断が勝ちすぎているきらいもあるので、「話しているうちにそれ以上押し問答をするのも面倒になってきた」という形にならされている。

ショート・ヴァージョンのカットされた「彼女はちょうど今家に帰ってきたばかりだったのだ」は、トニー滝谷のところから自宅のアパートに戻るまでの間に、を意味していたが、「気が変わ」るための時間的な経過は「事情が変わった」に改訂のため不要になったわけで、そのための割愛だろう。

トニー滝谷の側では「悪いと思う」→「申し訳ない」、「気が変わった」→「事情が変わった」など主観的なきらいがあるところに改訂が入っている。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

もちろん彼女はトニー滝谷に対して腹を立てた。でも少し時間がたつと、結局はこうなって良かったのだという気がしてきた。仕事がなくなったのは残念だけれど、だいたいが不自然な話だったのだ。

彼女はトニー滝谷の家から持ってかえってきた何着かの服を一枚一枚きれいに広げてハンガーにかけ、靴を靴箱に入れた。そしてしばらくじっとその光景を眺めていた。それから面接のために着ていった服を脱いで、ブルージーンとトレーナーシャツに着替え、床に座って冷蔵庫から缶ビールを出して飲んだ。そして彼女はトニー滝谷の家の衣装室にあったあの洋服の山を思い出して溜め息をついた。あんなに沢山の美しい服、と彼女は思った。あれだけのものを集めるにはきっとものすごいお金と時間がかかったに違いない。でもその人は死んでしまったのだ。部屋ひとつぶんの洋服をあとに残して。

（c-1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

それからしばらくの間、彼女はトニー滝谷に対して腹を立てていた。しかしそのうちに結局はこうなって良かったんじゃないかという気がしてきた。だいたいそもそもの最初から何だか不自然な話だったのだ。仕事がなくなったのは残念ではあるけれど、まあ何とかなるだろう。

彼女はトニー滝谷の家から持ってかえってきた何着かの服を一枚一枚きれいに広げて洋服ダンスにかけ、靴を靴箱に入れた。それらの新参者に比べると、もとからそこにあった彼女の自前の服や靴はみんな愕然とするくらいみすぼらしく見えた。それはまったく違う次元の素材で作られた別の種類の物質であるように彼女には感じられた。彼女は面接のために着ていった自分の服を脱いでハンガーにかけ、ブルージンとトレーナーシャツに着替え、床に座って冷蔵庫から缶ビールを出して飲んだ。そして彼女はトニー滝谷の家の衣装室にあったあの洋服の山を思い出して溜め息をついた。あんなに沢山の美しい服、と彼女は思った。やれやれ、あの衣装室はこの私の住んでいるアパートの部屋よりもまだ広いのだ。あれだけの服を買い集めるには、きっとものすごいお金と時間がかかったに違いない。でもその人はもう死んでしまったのだ。部屋ひとつぶんのサイズ7の服をあとに残して。あんなに素敵な服をいっぱい残して死んでしまうというのはどんな気持ちのするものなのだろう、と彼女は考えた。

（c-2・3）ロング・ヴァージョン（単行本・文庫本）

それはまったく違う次元の素材で作られた別の種類の物質であるように彼女には感じられた。彼女は面接のために着ていった自分の服を脱いでハンガーにかけ、ブルージーンズとトレーナーシャツに着替え、床に座って冷蔵庫から缶ビールを出して飲んだ。（以下同）

不自然な話云々はロング・ヴァージョンで挿入されてきたものであり、「まあ何とかなるだろう」のフレーズは省三郎の台詞として使われているものでもある。目の前の物事に拘泥しない（状況を深刻に捉えない）度量を、彼女に使わなくてもよい気はするが。

ショート・ヴァージョンのカットされた「そしてしばらくじっとその光景を眺めていた」は、ロング・ヴァージョンでは九六字の説明として、いかに彼女の家の服たちとは雲泥の差があるかの詳述が挿入されている。先に見たように、応募女性の服等の

品質が妻の服と格差があることを定位しようするための増補がされ、ロング・ヴァージョンで追加の「服も靴も清潔ではあったが、よく見るといささかくたびれていた」も、普及品を使い込んでいる様を増補していたが、それと軸を一にする増補である。ショート・ヴァージョンの「そしてしばらくじっとその光景を眺めていた」では、新参者たちへのまなざししか感じないが、ロング・ヴァージョンの描写は、格差を絶対的に思い知る過程になっている。

ロング・ヴァージョンc-2・3（単行本・文庫本）で「ブルージーン」を「ブルージーンズ」にするが、「Blue jean」はカジュアルのデニムのズボン、つまりジーパンを指すのであるが、日本で通っているように「jeans」にしたのだろう。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

その女は貧乏なことで有名だったので、彼女が毎日違う新しい服を着てくるのを見て友人たちは驚いた。どれも洗練された高価なブランドの服だったからだ。そんなものいったいどこで手に入れたのよ、とみんなは尋ねた。説明はできないの、と彼女は言った。それにもし説明しても、どうせあなたたちきっと信じないわよ。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧・単行本・文庫本）

彼女の友人たちは、彼女が貧乏なことをよく知っていたので、彼女が会うたびに違う新しい服を着てくるのを見てひどく驚いた。そのどれもが洗練された高価なブランドの服だったからだ。そんな洋服をいったいどこでどうやって手に入れたのよ、と友達はみんな尋ねた。説明することはできないの、約束だから、と彼女は言った。そして首を振った。それにもし説明しても、どうせあなたたちきっと信じないわよ、と彼女は言った。

ショート・ヴァージョンの「貧乏で有名」はフレーズとしては村上ぽいが、それがあまりに周知すぎることになるので、ロング・ヴァージョンでは「彼女の友人たちは」という狭いコミュニティに定位しなおしている。

ショート・ヴァージョンの「彼女が毎日」も「一週間分」しか持ち出していないわけで、ロング・ヴァージョンの「会うたびに」の方が無理がない。

ロング・ヴァージョンの「約束だから」も「この話は誰にも話さないでほしい」があるので説明できない理由としても増補した方がいい。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

トニー滝谷は結局古着屋を呼んで、妻の残していった服を全部引き取らせた。たいした値はつかなかった。彼がその洋服のために払った金額の二十分の一にもならなかった。でもそれは彼にとってはもうどうでもいいことだった。彼としてはただでもいいから一着残らず持っていってほしかったのだ。この先二度と自分の目の触れない遠い場所に。

（c-1・2）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（単行本）

トニー滝谷は結局古着屋を呼んで、妻の残していった服を全部引き取らせた。たいした値はつかなかった。おそらく彼がその洋服のために払った金額の二十分の一にもならなかったはずだ。でもそれは彼にとってはもうどうでもいいことだった。彼としてはただでもいいから一着残らず持っていってほしかったのだ。この先二度と自分の目の触れない遠い場所に。

彼はからっぽになったそのかつての衣装室を、**そのあと何年もずっと**からっぽのままにしておいた。

（c-2・3）ロング・ヴァージョン（単行本・文庫本）

トニー滝谷は結局古着屋を呼んで、妻の残していった服を全部引き取らせた。たいした値はつかなかった　でもそれはもうどうでもいいことだった。彼としてはただでもいいから一着残らず持っていってほしかったのだ。この先二度と自分の目の触れない遠い場所に。

彼はからっぽになったそのかつての衣装室を、**長いあいだ**からっぽのままにしておいた。

ショート・ヴァージョンの「彼がその洋服のために払った金額の二十分の一にもならなかった」は「はずだ」を付して、ロング・ヴァージョンc-1（全作品⑧）に継承されたが、ロング・ヴァージョンc-2・3（単行本・文庫本）ではカットされる。直前の「たいした値はつかなかった」で十分と考えたと思われる。

ロング・ヴァージョンc-1（全作品⑧）で増補された「彼はからっぽになったそのかつての衣装室を、そのあと何年もずっとからっぽのままにしておいた」は（抽出本文では太字・引用では傍線箇所）を、ロング・ヴァージョンc-2・3（単行本・文庫本）では「衣装室を、長いあいだからっぽのままにしておいた」と改訂する。

この挿入文によって、いかに妻の衣装室をからっぽにしていたかを知り得るわけであるが、多少の矛盾も生じてくることになる。父省三郎が亡くなるが「二年後」と明示されている。父の遺品のレコードコレクションをこの部屋に配置することになる。とすると、ロング・ヴァージョンc-1（全作品⑧）の「そのあと何年もずっとからっぽ」はおかしい。ロング・ヴァージョンc-2・3（単行本・文庫本）の「長いあいだ」も長い間の解釈が分かれるところではあるが、二年を長い間と捉えるのか、となると少しその、整合性は気になるところである。ともかく、ロング・ヴァージョンc-1（全作品⑧）の「そのあと何年もずっと」は改訂して正解ではある。

次は、引用に際し、私に①②③を付させていただく。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

①ときどき彼はその衣装室に入り、一時間も二時間も床に座ってただじっと壁を眺めていた。そこには死者の影の、そのまた影があった。しかし年月がたつにつれて、彼は妻に対してかつて抱いたあの鮮やかな感情を呼びおこすことができなくなっていった。

②記憶は風に揺らぐ霧のようにゆっくりとその形を変え、変えるたびに薄らいでいった。

③彼はときどき、その部屋の中でかつて涙を流した女のことを思い出した。特徴のない顔をした、名前も覚えていない女。妻の残していった服の山を前にして泣いていた女。いろんなことをすっかり忘れてしまったあとでも、トニー滝谷は不思議にその女のことだけはよく覚えていた。

（c-1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

①ときどき彼はその部屋に入り、何をするともなくただぼんやりしていた。彼は一時間も二時間も床に座ってからっぽの壁をじっと眺めていた。そこには死者の影の、そのまた影があった。しかし年月がたつにつれて、彼はかつてそこにあったものを思い出すことができなくなっていった。その色や匂いの記憶もいつしか消えてしまった。そしてかつて抱いたあの鮮やかな感情さえもが、記憶の領域の外へとあとずさりするように退いていった。

②記憶は風に揺らぐ霧のようにゆっくりとその形を変え、形を変えるたびに薄らいでいった。それは影の影の、そのまた影になった。そこに触知できるのはかつて存在したものがあとに残していった欠落感だけだった。時には妻の顔さえうまく思い出せなくなることがあった。

③しかし彼はときどき、かつてその部屋の中で妻の残していった服を見て涙を流した見知らぬ女のことを思い出した。その女の特徴のない顔や、くたびれたエナメルの靴のことを思い出した。そして彼女の静かな嗚咽が記憶の中に蘇ってきた。彼はそんなものを思い出したくはなかった。でも知らず知らずにそれが蘇ってくるのだ。いろんなことをすっかり忘れてしまったあとでも、不思議に名前も覚えていないその女のことだけは忘れられなかった。

（c-2・3）ロング・ヴァージョン（文庫本）

①ときどき彼はその部屋に入り、何をするともなくただぼんやりしていた。一時間も二時間もそこの床に座って壁をじっと眺めていた。そこには死者の影の、そのまた影があった。しかし年月がたつにつれて、彼はかつてそこにあったものを思い出すことができなくなっていった。その色や匂いの記憶もいつしか消えてしまった。そしてかつて抱いたあの鮮やかな感情さえもが、記憶の領域の外へとあとずさりするように退いていった。

②記憶は風に揺らぐ霧のようにゆっくりとその形を変え、形を変えるたびに薄らいでいった。それは影の影の、そのまた影になった。そこに触知できるのはかつて存在したものがあとに残していった欠落感だけだった。時には妻の顔さえうまく思い出せなくなることがあった。

③しかし彼はときどき、かつてその部屋の中で妻の残していった服を見て涙を流した見知らぬ女のことを思い出した。その女の特徴のない顔や、くたびれたエナメルの靴のことを思い出した。そして彼女の静かな嗚咽が記憶の中に蘇ってきた。彼はそんなものを思い出したくはなかった。でも知らず知らずにそれが蘇ってくるのだ。いろんなことをすっかり忘れてしまったあとでも、不思議に名前も覚えていないその女のことだけは忘れられなかった。

基本、ショート・ヴァージョンの増補がなされていることは一目瞭然なのだが、ロング・ヴァージョンc-1（全作品⑧）とロング・ヴァージョンc-2・3（単行本・

文庫本）の違いは、①③の囲みの二ヶ所の「彼は」の省略と、c−1（全作品⑧）①で増補した「床に座ってからっぽの壁を」を、c−2・3（単行本・文庫本）では「そこの床に座って壁をじっと」に改訂したところか。最終形態は、最初のショート・ヴァージョン「床に座ってただじっと壁を」に戻っている。

そして特記したいのは、応募女性について、ショート・ヴァージョンでは「よく覚えていた」という記憶の中の一部であるものが、ロング・ヴァージョンでは「その女のことだけは忘れられなかった」と改訂されているところである。霧のように形を変え、形を変えるたびに薄らいでいき、影の影の、そのまた影になり、あとに残る欠落感の中、時には妻の顔さえうまく思い出せなくなった中で、である。「よく覚えていた」とは異なる、強められた表現に替えられているのである。

（b−1）ショート・ヴァージョン（「文藝春秋」六八巻七号）

妻が死んだ二年後に滝谷省二郎が癌で死んだ。彼は古いレコードのコレクションを残していった。何千という数のジャズのレコードだった。その中にはトニー滝谷の名づけ親がくれたレコードも数多く含まれていた。彼はそれを宅急便会社の段ボール箱に入れたまま、空っぽになった妻の衣装室に積み上げておいた。レコードは黴臭かったので、空気を入れ換えるために時折窓を開ける必要があった。しかしそれを別にすれば、彼はその部屋にめったに足を踏み入れなくなった。

（b−2）ショート・ヴァージョン（『文藝春秋短篇小説館』）

妻が死んだ二年後に滝谷省二郎が癌で死んだ。彼は古いレコードのコレクションを残していった。何千という数のジャズのレコードだった。その中にはトニー滝谷の名づけ親がくれたレコードも数多く含まれていた。彼はそれを宅配便会社の段ボール箱に入れたまま、空っぽになった妻の衣装室に積み上げておいた。レコードは黴臭かったので、空気を入れ換えるために時折窓を開ける必要があった。しかしそれを別にすれば、彼はその部屋にめったに足を踏み入れなくなった。

（c−1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

妻の死んだ二年後に滝谷省三郎が肝臓の癌で死んだ。癌にしては苦しみは少なく、入院していた期間も短かった。彼はほとんど眠るように死んでいった。そういう意味でも彼は最後までツキに恵まれていた。多少の現金と株券を別にすれば、滝谷省三郎は財産というほどのものは残さなかった。残されたものといえば形見の楽器と、古いジャズ・レコードの膨大なコレクションくらいだった。それらのレコードをトニー滝谷は、宅配便会社の段ボール箱に入れたまま、からっぽの衣装室の床に積み上げておいた。レコードは黴臭かったので、空気を入れ換えるために定期的に窓を開けなくてはならなかった。しかしそのときを別にすれば、彼がその部屋に足を踏み入れることはまずなかった。

（c−2・3）ロング・ヴァージョン（単行本・文庫本）

妻の死んだ二年後に滝谷省三郎が肝臓の癌で死んだ。癌にしては苦しみは少なく、入院していた期間も短かった。ほとんど眠るように死んでいった。そういう意味でも彼は最後までツキに恵まれていた。多少の現金と株券を別にすれば、滝谷省三郎は財産というほどのものは残さなかった。（以下同）

ロング・ヴァージョンc−1（全作品⑧）とロング・ヴァージョンc−2・3（単行本・文庫本）の違いは、囲みの「彼は」の省略だけである。

ショート・ヴァージョンの「その中にはトニー滝谷の名づけ親がくれたレコードも数多く含まれていた」はシチュエーションとしては少佐からもらったレコードが含まれているのは故なきことではないのだが、父の形見、とするには不純物となりえるのでカットしたと考えられる。

ロング・ヴァージョンでは病気の部位、最期の様子などが増補されている。「最後までツキに恵まれていた」云々の強運の星の下に生まれているくだりは、ロング・ヴァージョンで増補した省三郎像と対応する関係から、このような結びとなったわけである。

形見の楽器も追加されている。よく考えてみれば省三郎はプレーヤーである。ショート・ヴァージョンの「時折の換気」は、ロング・ヴァージョンでは「定期的に窓を開」ける形に改訂されている。

なお、b−1（「文藝春秋」六八巻七号）では「宅急便会社」を使っているが、「宅急便」はヤマト運輸の商標であるので、b−2（『文藝春秋短篇小説館』）から「宅配便会社」となっている。これは内容上の改訂ではないので本文異同としては特に取り上げず、今まで異同もカウントしないで来たが[2]、今回は当該箇所の本文を扱うので明示しておきたい。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

一年ばかりたつと、そんなものを家の中に抱え込んでいることがだんだんわずらわしくなってきたので、彼は中古レコード屋を呼んで全部引き取らせた。貴重なレコードが多かったせいで、かなりの値段がついた。小型自動車が買えるくらいの金額だったが、それも彼にとってはどうでもいいことだった。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（単行本・文庫本）

そのようにして一年が過ぎた。しかしそんなレコードの山を家の中に抱え込んでいることが彼にはだんだん煩わしくなってきた。そこにあるもののことを考えただけで、ときどきひどく息苦しくなった。夜中に目が覚めて、そのまま眠れなくなることもあった。記憶は不鮮明だった。しかしそれはそこに、しかるべき重量を持ってきちんと存在していた。

彼は中古レコード屋を呼んで値段をつけさせた。ずっと昔に廃盤になってしまったレコードが多かったせいで、かなりの値段がついた。小型自動車が買えるくらいの金額だったが、それも彼にとってはどうでもいいことだった。

ショート・ヴァージョンの「だんだんわずらわしくなってきた」理由をロング・ヴァージョンでは示している。「しかるべき重量を持ってきちんと存在」感がある形に増補されているわけである。ちょうど、沢山の妻の服が「影の影」にもかかわらず、存在感を発信していたような認知されるモノに「何千の」（ショート・ヴァージョン）・「膨大な」（ロング・ヴァージョン）遺品のレコードコレクションが引き上げられているわけである。この点で亡妻のコレクションたる服と亡父のレコードコレクションは等価の位相であることも判明する。その証拠に、父のコレクションを整理し、亡妻の服も亡父もレコードも処分することで、トニー滝谷ただ一人となってしまう仕掛けになっているわけである。

（b-1・2、c-1）ショート、ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

その レコードの山がすっかり消えてしまうと、トニー滝谷は今度こそ本当にひとりぼっちになった。

（c-2・3）ショート、ロング・ヴァージョン（単行本・文庫本）

レコードの山がすっかり消えてしまうと、トニー滝谷は今度こそ本当にひとりぼっちになった。

ロング・ヴァージョンc-2・3（単行本・文庫本）で「その」という指示語がカットされているとはいえ、ほぼ、すべてのヴァージョンのラストの一文の「今度こそ本当にひとりぼっちになった」はそれを意味しているわけである。

おわりに

アシスタント応募女性の描写については、ロング・ヴァージョンc-1（全作品⑧）の増補改訂が、ほぼそのままロング・ヴァージョンc-2・3（単行本・文庫本）にも継承されていることが判る。細部の改訂については、今、本稿で見てきた通りである。

ロング・ヴァージョンc-1の増補については、ショート・ヴァージョンと大筋は変わらない中、ショート・ヴァージョンの増補説明が主であることも見てきた通りである。今回言及出来ていない事柄やまとめについては続稿としたい。

〈注〉

(1) 拙論『トニー滝谷』の本文改訂(一)―シャネル削除による人物造形―」「解釋學」六七輯（平二五・三）、『トニー滝谷』の本文改訂(二)―ショート・ロング両ヴァージョンそれぞれの本文異同―」「解釋學」七三輯（平二七・三）、「全作品⑧所収『トニー滝谷』本文の性格―定本との差異とその独自性が意味するものと―」「解釈」六一巻七九号（平二七・八）、『トニー滝谷』の本文改訂(三)―全作品⑧本文の性格(続)・五二箇所七九個の本文異同一覧―」「表現学」三号(平二九・三)、『トニー滝谷』の本文改訂(四)―番外編・トニー谷と滝谷親子、その同時代性―」「解釋學」八一輯（平二九・一一）。『トニー滝谷』の本文改訂(五)―ショート・ロング両ヴァージョンの上海関係についての描写―」「表現学」四号(平三〇・二)、『トニー滝谷』の本文改訂(六)―ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写（1）―」「表現学」五号(平三一・三)、『トニー滝谷』の本文改訂(七)―ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写（2）―」「表現学」六号(令二・三)。

(2) これは「文藝春秋」六八巻七号（平二・六）掲載作品を、単行本『文藝春秋短篇小説館』(平三・九）に収録して刊行しようという途上で校閲部等からの指摘で改めたものと考えられる。